

高知大学医学部附属病院 開院30周年記念

医療・教育・地域の人々を
つなぐ大学病院

特集号
2011
TAKE FREE ¥0



寄附講座(災害・救急医療学)を設置



災害における派遣チームを通じた救急体制

災害派遣チーム「DMAT」について

附属病院は、発災後概ね48時間以内の災害急性期に活動できる、専門的訓練を受けたDMATを有しています。東日本大震災での医療救護でも活躍、南海地震も視野に入れ、災害拠点病院として地域の核となるべく日頃より研鑽を積んでいます。



高知大学医学部附属病院

日本医療機能評価機構認定病院／都道府県がん診療連携拠点病院／エイズ治療の中核拠点病院／肝疾患診療連携拠点病院／災害拠点病院
〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 Tel.088-866-5811(代表) Tel.088-866-5815(時間外) <http://www.kochi-ms.ac.jp/~hsptl/index.shtml>

私たちは「患者さんの権利」を大切にします

- 最善の医療を公平に受ける権利
- 診療について別の医師等の意見を求める権利
- 医師等から十分な説明を受ける権利
- 自らの意思で診療内容を決める権利
- 診療の内容に関するあらゆる情報を得る権利
- 診療に関する個人情報及びプライバシーが守られる権利
- 一人の人間として、その人格、価値観などが尊重される権利

医学部附属病院の基本理念

- 患者さんの尊厳と地域特性を重視した医療環境の実現
- 深い人間愛と厳しい倫理観を備えた医療人の養成
- 高度先進医療開発へのモチベーションを高める医育研修環境の充実
- 経営効率をも考えた医療の推進

お問い合わせ先 皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。



高知大学
Kochi University

高知大学広報戦略室 <http://www.kochi-u.ac.jp/JA/>
TEL.088-844-8643 FAX.088-844-8033
〒780-8520 高知市曙町2-5-1 E-mail:kh13@kochi-u.ac.jp

集学的癌治療に向けた トランスレーショナルリサーチの展開 ～中性子捕捉療法を中心として～



東京大学大学院工学系研究科
原子力国際専攻特任准教授：第1期生
やなぎ え ひろ のぶ

柳衛 宏宣氏

集学的治療が行われる癌治療において、中性子捕捉療法をテーマに研究しています。中性子捕捉療法とは癌細胞に熱中性子・熱外中性子の照射を行うもので、あらかじめボロン10（ホウ素）を癌細胞に取り込ませることで、理論的には癌細胞のみを選択的にたたくことができます。このボロンを癌細胞に集積させるために、ドラッグデリバリーシステムを応用。リボソームを使い、臨床に向けた研究が重ねられています。また、シラス多孔質ガラスを用いたボロン封入WOWエマルジョンによって、腫瘍の中で高濃度を保てることがわかり、臨床試験段階に入っています。

大規模災害と医療機関



高知赤十字病院救命救急センター長
第1期生
にし やま きん ひと

西山 謹吾氏

大規模災害に、医療機関はどのように関わればいいのか。災害救護は日本赤十字社が古くから担ってきましたが、医療分野は不十分でした。阪神淡路大震災を契機に、災害“医療”救護の必要性が叫ばれ、実施されるようになり、今回の東

日本大震災には私自身もDMATとして災害救護に参加しました。そしてその効果が最大に発揮されるためには医療チームはもとより、消防や行政、自衛隊などあらゆる集団が協働し、「すべては被災者のために」という共通の目的を持ち、共有化することが大切だと痛感しました。また、共有化は広く医療全般に必要な考えであり、高知大学がその視点を持つ人材を輩出することを期待しています。

文明としての医学 文化としての医療学



高知大学
学長
さか ら ゆづ ずけ

相良 祐輔氏

文明と文化の視点に立つて、21世紀の医学と医療学を考察。死生観と文明の歴史を太古から読み解くとともに、生物学・医学の歴史を振り返りました。「遺伝子組み換え、体外受精などが用いられる現代の医学技術は、人間の領域を超えるものとして

人類の未来への影響に不安を覚えます。ヒトの遺伝子の32000個という数を科学者は少ないと言うが、その少ない遺伝子しかない人間という種の持つ素晴らしい多様性に対して科学者は畏敬の念と人の尊厳を思うべきであり、21世紀における真の科学者の姿勢です。利便性だけで文明を取り入れることはしない、という毅然たる文化を創造するための努力を、ま

ず医療の領域ですべきだと考えます。」



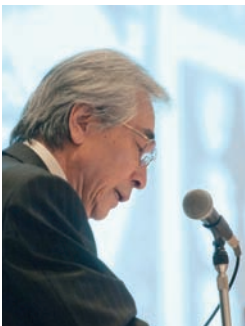
西山 謹吾 氏

高知県医師会会長・永野健五郎様は、「厳しい医療環境に見舞われる中、少子超高齢化時代を迎える高知県にあって高知大学医学部が果たす役割は大きい」と、さらなる貢献を期待されるとともに、「県医師会と連携し、ともに地域医療の発展に力を尽くしたい」と述べられました。

それぞれの祝辞に込められた思いを受け止め、これからの附属病

医療の最前線で 活躍する卒業生

記念講演会は2部構成で、第1部は高知大学医学部の1期生で、医療の第一線で活躍する2人の卒業生、



相良 祐輔 氏

院の取り組みに生かしていくために、医学部関係者一同は身の引き締まる思いで話を傾聴しました。



高知県民の 健康の砦として 開院した附属病院

去る10月15日、高知大学医学部附属病院の開院30周年の記念事業として、新阪急ホテルを会場に記念式典と記念講演会を開催。来賓の方々をはじめ、学内外の関係者など約400名の皆様にご出席いただきました。

最初に行われた記念式典では、医学部長の脇口宏が式辞を述べました。開院から今日までの病院の沿革を紹介し、また最近の取り組みとして、「先端医療学推進センター」の概要を説明し、附属病院と医学部が一体となった研究・開発の一端を披露。「高知県民の健康の砦としてこれからも一丸となって邁進します」と締めくくりました。

続く学長挨拶では高知大学学長の相良祐輔が、「どのように地域と結びついた病院であり続けるか」という「開院前夜」当時の思いに言



高知大学医学部附属病院 病院長 杉浦 哲朗



高知大学医学部 医学部長 脇口 宏



御来賓の皆様

最初に、文部科学省大臣官房審議官（高等教育局担当）・奈良人司様からは、附属病院の30年間を「地元高知県のみならず、国民の健康と福祉の増進に多大な貢献」と評価をいただきました。良質な医療人の育成など社会のニーズに応えるため、国・地方大学の連携を強化していくと話されました。

「開院当時は中学生だった」と話す高知県知事・尾崎正直様は、開院にあたって地域の人々が喜んでいた思い出を紹介。日本一の健康長寿県構想や南海地震対策を進める県として、高知大学医学部の貢献の大きさにふれるとともに、地域に貢献する医師の育成や災害医療の分野での今後の活躍に期待を込められました。



柳衛 宏宣 氏

来賓の言葉に こめられた 医学部への期待

今回の記念式典では、各界でご活躍の方々に来賓として臨席いただき、3名の皆様に祝辞をいただきました。

相良学長による講演は、過去の歴史をひも解きながら、医療を文明と文化の2つの視点から考察した医学論を展開しました。これからの医療がどうあるべきかを問う、深い示唆を含んだ内容に会場からは多くの拍手が寄せられました。

講演会後には、記念祝賀会を開催。附属病院長・杉浦哲朗の挨拶の後、衆議院議員・中谷元様と、南国市長・橋詰壽人様から祝辞をいただきました。

御来賓の方々や病院関係者ら24名でにぎやかに鏡開きを行った後、元高知医科大学学長・池田久男様の乾杯の発声とともに、和やかに祝宴が始まりました。会場には



医学部OB・OGも多数集まり、開院当時の懐かしい話に花を咲かせていました。

病院再開発の 基本理念

『地域に密着した先端医療の
推進と高度医療人の育成』

- I 県民人口減や地域医療ニーズへの対応
～少子高齢化に伴う疾病構造の変化への対応～
- II 県民医療費の抑制
- III 先端医療の推進と高度医療人の育成
(教育・研究)への対応
- IV がん拠点病院としての病院機能の強化
- V 災害医療への対応

未来に向けて 新しいスタートを

高知大学、高知県民の悲願であった高知大学医学部附属病院の
再開発が平成22年8月に認可されました。
今後、病院再開発と医学部の再編が連動する事で
地域医療への様々な貢献が期待されています。



地域に密着した大学病院は、
地域の皆様方とともに歩んで30年を迎えました。
今後更に高知県の医療拠点を目指す大学病院の姿を知ること
で地域の皆様と大学病院との関係が見えてきます。

進化する附属病院

高知大学医学部附属病院 病院長
杉浦 哲朗

30年分の診療記録と
チーム医療に
期待されること

地域に密着した大学病院として昭和56年に開院して以来、患者さんに質の高い全人的医療を提供すると共に、教育そして研究に取り組んで参りました。また総合医療情報システムを活用した情報医療は蓄積された30年分の診療データを解析し健康維持に

役立てる予防医学として、県民特有の病症改善に繋がっています。
近年、国民の安心安全な医療を求め
る中、医療の高度化や高齢化社会の到来
により医療現場は複雑化し過剰な臨床
業務に追われています。その為、当院では
各専門スタッフが情報を共有し業務を
分担、連携する「チーム医療」により良質
で効率的な医療を提供しています。

地域に密着した
先端医療の推進と
優れた人材の育成

高知大学医学部の悲願であった附
属病院の再開発が平成23年度予算に
認められました。これにより「地域に
密着した先端医療の推進と優れた医
療人の育成」の充実が図れます。医学
部再編と連動した「先端医療学推進
センター」を核としたトランスレー
ショナルリサーチの成果は、地域に留
まらずわが国の医療への貢献が期待
されます。



高知県民の
ニーズに応えられる
施設、規模を

本病院は、高知県が目指す「日本一
の健康長寿県」構想を支え、社会の期
待に応えるべくこの地域における頻
度の高い病気の治療成績向上を目指
した研究を行います。また、開院以来
蓄積されている膨大な医療情報は、
県内特有の生活習慣病対策の研究に
大いに期待されています。そして、地
域医療の担い手となる良医を育成
し、少子高齢化の進むわが国の医療
のロールモデル構築を目指します。

附属病院のイノベーションは医学
部とも連動しており、特にその核と
なる先端医療学推進センターでは、
各部門が最先端医療を目指した研
究を推進し、その研究成果を医療現
場に還元できる優れた医療人の育成
も兼ねています。
高知大学医学部附属病院は、次
なる30年に向け職員一丸となって医
療の質と安全の確保に努めると共
に、高知県における地域医療ネット
ワークの更なる充実を図り、県民の
ニーズに沿った予防医学や最先端
医療の開発を推進し、社会の期待に
応えるべく邁進していきたくと考え
ております。



高知大学医学部附属病院 病院長 杉浦 哲朗

災害時の現場で
活躍出来る
医療体制の構築を

災害時の救急医療体制を構築す
る人材の育成や研究を目的とする
災害・救急医療学講座が高知県を
寄附者として医学部に開設されま
した。災害時の現場で活躍出来る人
材の育成を通して災害医療体制が
充実され、当院は大災害時の県民
医療を担う拠点となります。更に、
今後の南海地震に備えた大規模災
害対策として、新病棟の屋上にヘリ
ポートを設置し、災害医療体制の
充実を図ります。

看護の現場から
患者さんの
思いに寄り添う

附属病院では現在、約560名の看護職員が勤務しています。質の高い看護を安定的に提供するためには、看護師の十分な確保と定着が欠かせません。看護部では勤務形態などの労働環境の改善を図り、院内保育施設である「こはすキッズ」を設置するなどして、全国の



大学病院の中で最も低い離職率を達成しています。一方で、各自が専門職業人としての質的向上を目指し、独自に目標を設置し、ニーズに応えることができるよう自己研鑽に努めています。また、組織横断的に活動を行うチームにも積極的に参加しています。「病院機能改善ひまわりプロジェクトチーム」では、患者さんから寄せられた声を生かし、院内の改善に取り組んでいます。

(右:文中写真)院内保育施設「こはすキッズ」
(下)「ひまわりプロジェクトチーム」病院機能改善委員会の様子



治療技術の
レベルアップに向けて

低侵襲手術教育
トレーニングセンター



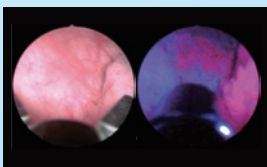
内視鏡外科をはじめ低侵襲手術の技術習得のため開設。ヴァーチャル手術トレーニング機器は、基礎的なものだけでなく具体的な手術を想定したトレーニングをコンピュータの画面で行うことができる設備です。患者さんの負担軽減に併せ、先端医療機器と技術の融合のため、スキルアップを行います。

近赤外蛍光術中ナビゲーション
カラーイメージングシステム



リンパ管や筋肉、脂肪内の血管や血流などから発せられる近赤外蛍光像により周辺組織を可視光像として抽出することができるシステム。乳がんの転移診断や心臓バイパス手術において130症例を超える使用実績があります。

蛍光内視鏡を用いた
術中光力学診断



膀胱がんは術後の早期再発頻度が高く、従来の内視鏡での視認確認が非常に困難です。光感受性物質を体内に投与しがんの位置を光の照射により視認する診断法として、平成22年5月厚生労働省にて「第3項先進医療」(高度医療)に承認されました。

進む新設備の導入

がん治療の
先進県を目指して

PETセンター



生体の機能情報と形態情報を融合させたイメージングが可能で、これまでの検査では発見が難しかった「がん」の位置や形、広がりを高精度に評価する事ができます。

国立大学病院で初導入
超音波治療設備

FUS 集束超音波治療



微弱な超音波の束を狙った患部に一極集中させることで焼却、メスで患部に傷をつけることなく、副作用も殆どないことで術後の日常復帰が容易でストレスが少ない治療です。

快適な
日常生活を叶える

骨盤機能センター



骨盤内の臓器として直腸、膀胱、子宮などの機能的異常により生じる病気を専門に診療します。専門施設として治療に取り組む事で排泄障害特有の患者さんの羞恥心の軽減と改善治療を進めます。



家庭医道場

(課外実習)

家庭医療学講座
平成19年7月開講
高知県寄附講座

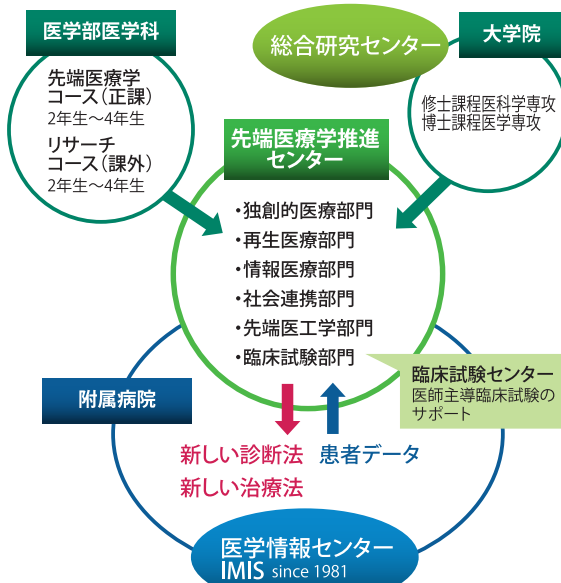


地域で未来の 医療人を育む

県内の中山間地・離島で年2回開催される課外実習。『地域に赴き、地域の人々と接し、地域を知る。家庭医療に携わる者に必要な知識、技術、コミュニケーション能力を身につけること』を目的としています。高知県の寄附講座である家庭医療学講座が主催し、市長会、町村会の寄附金により開催しています。開催地の自治体や医療機関のご協力をいただき、現場で働く医療者の講演会、住民と一緒に考えるワークショップなど盛り沢山の企画を用意しています。地域の人々とともに未来の医療人を育てています。

未来へつなぐ、明日への取り組み

高知大学オリジナルの 知見に基づく最先端医療開発



先端医療学推進センター

先端医療を 高知から発信

高知大学オリジナルの基礎研究成果や臨床知見に発した橋渡し研究(トランスレーションリサーチ)を推進し、最先端医療の開発、実用化を目指す研究拠点として、平成21年9月に開設されました。センターを核に、医学部、大学院、附属病院が連携して、地域と世界へ最先端医療を発信します。研究結果を医療の現場にフィードバックすることで、医療にイノベーションをもたらす、医療人の資質向上にも高い期待が持たれます。

先端医療学推進センターの腎機能再生医療研究班が活発に研究を行っており、平成23年度は医学部3年生や大学院生が日本やアメリカの腎臓学会で多くの演題を発表し、世界へ情報を届けました。第54回日本腎臓学会学術総会において優秀演題賞を受賞。



医学部が考える 優れた医療者とは

優れた医療者は自然科学者であり、かつ人文科学者の側面を身につけていなければならないと高知大学では考えます。自然科学の領域である医学的知識・技術を十分に身につけているだけでなく、臨床応用する際の対人関係の持ち方、思いやり、コミュニケーション能力といった人文科学的な能力を持ち合わせて初めて適切な診断と

優れた 医療者を育てる

研究マインドと地域医療

高知大学 医学部長 脇口 宏



対策を見極めることが可能となり、その結果、患者さんに最も適切な治療を提供することができ、特に現代社会で問題になっている生活習慣病やがん、あるいは精神的疾患は、患者さんの置かれている状況によつて適切な治療法の選択肢が多様なものになります。だからこそ、人文科学的であるファジーな面を大切にしなければなら

よいQOL生活の質を達成するために使われるべきものですが、自然の摂理に逆らうことは許されないと考えています。このことを、初代学長の平木潔先生は「敬天愛人」という言葉で表したのだと思います。天を敬い、畏れ、自然の摂理を大切にすること、それをベースにした自然科学と人文科学が融合した医療を行わなければ、真に倫理的な医療は実現しません。

研究マインドを 育む先端医療学 推進センター

医師として適切な診断を下すためには、患者さんの背景や患者さんが訴える症状に対する洞察力が必要で、洞察力を高めるために最適なトレーニングは研究することです。研究とは、想像し、推理し、証明し、検証をする作業であり、まさに臨床と同様です。

医学部では研究マインドを育むため、先端医療学推進センターを設置しました。学生時代から研究の楽しさに触れ、医学の発展を身を持って体験し、基礎医学と臨床医学の橋渡しになる研究を行うことで、新しい診断法や治療法の確立を目指しています。また、高知県のよりよい医療環境の実現も高知大学医学部の義務であり、研究のテーマでもあります。高知県の医療環境のグランドデザインになる地域医療のあり方を、今後も研究していきます。



高知大学 医学部長 脇口 宏

【対談】相良祐輔・奥谷文乃・前田長正
井上啓史・武内世生

志を紡ぐ

医学部の明日を考える

創成記の高知医科大学で学び
現在、研究や臨床、教育の現場で
奮闘をする5人の指導者たち。
これから何を目指すのか。
学長を囲み
さながらかつてのゼミのように
座談会は始まった。

医学部泌尿器科学講座
准教授：第6期生
井上 啓史氏

総合診療部
副部長・准教授：第6期生
武内 世生氏

医学部産科婦人科学講座
准教授：第2期生
前田 長正氏

高知大学
学長
相良 祐輔氏

医学部生理学講座
准教授：第1期生
奥谷 文乃氏

新設から伝統へ 変わっていく 今日の医学部

●相良 かつて、学生だった先生方によく言っていたのは、高知医科大学（現・高知大学医学部）は君たちの母校であり、大学を良くするのは君たちの役割だということでした。今、大学は大きな問題に直面しています。近い将来、国立大学の数が減り、そのありように激変が起こるのではないかと考えています。こうした状況を踏まえて、今の医学部をどのように見えていますか？

●井上 近年、先端医療学推進センターが設立されたり、家庭医療学講座が開講するなど着実に伸びてきていると思います。ただし、学生の大学を思う気持ちに関しては、変化してきたように感じます。私など6期生では先生方とともに、新しいものを作り上げようという気持ちが人一倍強かった。だから、愛校心を自然に持ったような気がします。一方、今はある程度の伝統があるので、当時とは学生の心構えが違って当たり前なのかな、とも思いますが。



く情熱的で、学生である自分たち自身も鼓舞してもらいました。みんなでこの大学を作り上げようという意識が非常に強く、いろいろな場面でポリシーをぶつけ合い、他人と関わり合って大学生活を送っていたように思います。



●相良 その情熱は今も保たれているのかな？

●前田 もちろん、今も変わらぬ愛校心を持ち、この大学のこと、特に医学部に関することは強く関心を持つようにしています。しかし、昨今の学生に目を転じると、昔と比べ冷めているのを感じます。医師国家試験の合格が最優先になることは当然だと思いますが、それが前面に出すぎているのではないかと学問というものが試験合格のためのひとつの手段に置き換えられているように見えます。母校の後輩である学生たちをみたときに、先輩としても何とかしなければならぬ、常々思っています。



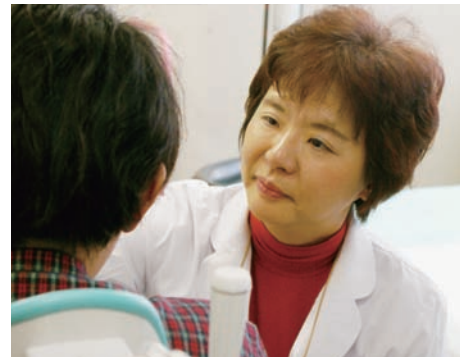
●武内 私は6期生で、5つ上の先輩が1期生で、5つ下の後輩が11期生でした。この先輩と後輩を比べると、大学に対する思いはかなり違っていたように思います。ただし、年を追うごとに落ち着いてきた、完成されてきたという言い方もできるかもしれません。最初は手作りだったのが、だんだんシステムティックになってきた、ともいえます。

大学をつくる 情熱にあふれた 開学当時

●前田 高知医大に入学当初は、地元高知で医学教育が受けられるということに気分が高揚しました。しかし、ほどなく、医学教育は「知識の修得」であり、記憶することに重点が置かれていることに気づきました。そうしたなか、相良学長の講義は「フリートーカーキングでディスカッションして、どんどん突っ込んで来い！」というパワフルなもので、これが大学の講義だと初めて実感しました。また、講義だけでなく、大学をつくることにしてもすこ

●相良 確かに今の若者は満たされてしまい、知的な活動作業に飢えていたという面では、私たちのほうがハッピーな状況だと言えるでしょう。医学・医療に対する情熱的な姿勢というものを、どうやって若い人たちに伝えていくべきなのか。指導者であるあなた方がよく考えなければならぬかもしれません。

●奥谷 近年、若者のコミュニケーションの取り方が変化しているようで、最近の学生は、研究室へ来なくなり、最近の学生は、基礎の研究室へ出入りすることで、教授や助教授の本業は教えることではなく研究だ、大学はそういうところだと気づかされました。もしかしたら、今の学生でこのような経験をする人は少ないのではないかと。指導者側からもっと魅力を発信して、学生が研究室に頻繁に訪ねてくるようにしたいと思います。しかし、情熱を持って学生に接するというのは本当に難しい、とも感じています。



高知大学医学部附属病院 30年の歩み

昭和54年4月1日
附属病院創設準備室を設置

昭和55年11月17日
ヒボクラテスの木を植樹



ヒボクラテスの木

昭和56年4月1日
医学部附属病院を設置

昭和56年10月12日
開院記念式典挙行政

昭和56年10月19日
医学部附属病院での診療開始

昭和61年4月22日
医学部附属病院に救急部を設置

昭和63年5月25日
医学部附属病院に輸血部を設置



基礎・臨床研究棟

平成2年6月8日
医学部附属病院に
集中治療部を設置

平成3年10月12日
開院10周年記念式典挙行政

平成5年4月1日
医学部附属病院に
周産母子センターを設置

平成7年4月1日
医学部附属病院に
リハビリテーション部を設置

平成9年4月1日
医学部附属病院に
総合診療部を設置

平成10年4月1日
医学部附属病院に高知県立
高知江の口看護学校高知医科
大学医学部附属病院分校
（院内学級）を開設

平成14年4月1日
医学部附属病院に
光学医療診療部を設置



大学院研究棟

平成15年4月1日
医学部附属病院の第1外科
第2外科を外科に再編



アンパンマンキャラクターによる院内表示
©やなせたかし／プレーベル館・TMS・NYV



●**相良** 医学部の教授会で、「僕たちは大学にずっといるが、医学教育のなんたるかを勉強したことはない。常に新しい疾病を解析して、それに対する適応、適性なる医療学を完成する。そのために情熱を持っていろいろな研究をやっていた」と話すことがある。医学教育というものは、各科の先生方の夜も寝ずに研究にいそしむ、その後ろ姿を見ることができた。先生の持っている全人格を後ろから、あるいは横から眺めたりして、自分自身を高めていく。これが大学の医学部だと思っています。やはり、自分で這いあがろうという

自ら学び、 高める姿勢が 医学者のあるべき姿

●**相良** 医学部の教授会で、「僕たちは大学にずっといるが、医学教育のなんたるかを勉強したことはない。常に新しい疾病を解析して、それに対する適応、適性なる医療学を完成する。そのために情熱を持っていろいろな研究をやっていた」と話すことがある。医学教育というものは、各科の先生方の夜も寝ずに研究にいそしむ、その後ろ姿を見ることができた。先生の持っている全人格を後ろから、あるいは横から眺めたりして、自分自身を高めていく。これが大学の医学部だと思っています。やはり、自分で這いあがろうという

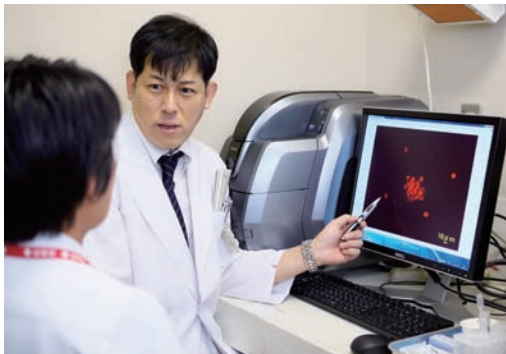


姿勢がなければだめだし、自分がその先生に関心を持ち、情熱的にディスカッションすることによって、だんだん鍛えられていく。

女性医師の 活躍のため 環境整備が必要

●**相良** これからの医学部や医学に対する考えをお聞きしたい。奥谷先生、女性研究者としていかがですか？
●**奥谷** 基礎研究においては、女性だからやりにくいと感じたことはありません。研究は臨床と違って、自分の裁量で進めていっても患者さんに迷惑をかけるわけではありませんから。だから、女子学生に基礎研究者になるよう勧めています。

しかし、臨床医としてもっと活躍してほしいと思います。女性医師の場合、出産・育児との両立、すなわちワーク・ライフ・バランスが大きな問題になります。しかし、結婚して家族を持ったり、出産育児を経て親となったりする経験は、人間性に深みを持たせ、医療に携わる上でとても有意義だと思っています。忘れがちなことですが、医師となるまでには膨大な国費をかけてもらっています。それを社会にきちんと還元しなければならぬということ、強く認識してほしいと思います。



一旦、出産などで一線を退いてから復帰する際の、再教育システムの充実や病児保育のできる託児所の整備などが必要だと思いますし、それにむけての活動にはこれからも協力していききたいと思っています。

先端医療学推進センターと 地域医療が これからのコアになる

●**相良** 高校生諸君に、高知大学医学部の夢を語るとすれば。
●**前田** これから先端医療学推進センターが本格的に稼働するので、高知医科大学が開学した時のように気持ちを進める対象ができたと思います。高知大学が大きく変わろうという象徴が目の前にあり、自分に参加して作り上げることができるよう。こうした夢を、学生も共有することができるようです。センターで臍帯血の治療が稼働し始めて症例が

今の学生はそうした部分をあまり重視していないような気がします。さらに言えば、職業的な厳しさをあいまにするような時代が来ているのではないかとさえ思います。言うまでもないことですが、医学で必要なのは客観性だけではありません。患者さん本人の思い、あるいは家族の悲しみというような感情を包み込み、解決に向けて進んでいくことが大事です。しかし、そういったことを、学生に手とり足とり教えることは難しい。自ら学ぶ意欲がない限り、身に付けることはできません。だから、プロの厳しさに触れないような教え方は適切ではない。そのあたりをどうやって伝えていくのか、一人ひとりの教員が自分自身の問題として考え、もつと自信を持つて



1例、2例と増えていけば、世の中を大きく変えられる可能性があります。ひよつとすると、日本は世界で初めて、出産の際の臍帯血をみんなが保存するということになるかもしれない。その突破口を高知大学から拓く。こうした未来が、我々だけでなく、学生の目にもイメージできるようなれば、本当に大きな改革になると思います。

●**井上** 前田先生がおっしゃったとおり、先端医療学推進センターが今後の高知大学のシンボリックなものになるべきだと思います。教育の場でもあり、なおかつトランスレシーショナルな意味も込められている。診療や基礎的な研究、教育のすべてを満たしている施設です。なおかつ、昔の高知医科大学で育った私たちにとっては、新しい高知大学の医学部の中にコアなものができたという新鮮な気持ちもあります。それと、もう一つは地域医療。これら二つを高知大学医学部の両輪として、どちらも高知大学発のブランドとして発信し、実際のプロダクトとして形にいくのが理想だと思います。



学生に向き合ってほしい。

平成21年に開設した先端医療学推進センター(P6)などを医学教育の閉塞感を打開する拠点として活用していただきたい。研究を進め、高知大学医学部がレベルアップすることを期待していますが、もう一つ「異年次教育」の効果にも期待しています。研究に参加した学生が3年生だったから2年生を、4年生ならば3年生を教育するという仕組みです。ただ国家試験に合格することだけを考えていたら、人間として成長することができない。もつと大事なことがあるということを、異年次教育を通じて学生たちに伝えてほしいと思います。

学生は若いので、必ず変わりますよ。ただ試験に合格するのがゴールではないことを、学生みんなが理解してくれるのが理想です。そこまでいなくても、そう思う学生を少しでも増やしていったほうがいい。そうすることが高知大学医学部の発展につながると思います。



●**相良** 先端医療学推進センターをはじめ、家庭医療学や災害・救急医療学という寄附講座など、高知大学の動きは大きな期待を集めています。また、世界で唯一、30年間の診療データが蓄積されているのも大きな強みです。これを使って疾病の危険因子や診断方法を探る「メディカルデータマイニング」による予防医学の研究も始まっています。

このような取り組みをこれから高知大学のコアとして、教員や今の学生、これから入学する若者たちがどんどん活用し、魅力ある高知大学医学部に発展させていただけたらと思います。



平成18年4月1日
医学部附属病院に
PETセンターを設置



PETセンター

平成18年4月1日
医学部附属病院に
院内保育所を設置

平成18年5月16日
医学部附属病院に
病理診断部を設置

平成18年7月18日
医学部附属病院に
がん治療センターを設置

平成19年

形成外科、小児外科外来を開設

平成19年4月1日
医学部附属病院の第1内科
第2内科、第3内科、
老年病科を内科に再編

平成19年7月1日

寄附講座(家庭医療学)を設置

平成19年11月13日
医学部附属病院に
こどもこころ診療部を設置

平成20年6月20日

医学部附属病院に
骨盤機能センターを設置



骨盤機能センター

平成21年2月10日
医学部附属病院に
低侵襲手術教育・
トレーニングセンターを設置



低侵襲手術
教育・トレーニングセンター



総合情報センター(図書館)医学部分館

平成21年4月1日
医学部附属病院に
臨床試験センターを設置

平成21年9月1日

先端医療学推進センターを設立

平成21年11月10日
高度医療・育成支援室を設置

平成21年

緩和ケア外来を開設

平成22年
高知インフラントサポート
センターを開設

平成22年
がんサロン「ひだまり」を開設

平成23年10月1日
寄附講座(災害・救急医療学)を
設置